

## 日本野鳥の会の調査研究活動と *Strix* 創刊の目的

研究部長 塚本洋三

日本野鳥の会の調査研究活動の基本は、野鳥とのふれあいを楽しみ深めながら、自然や野鳥の保護に役立つ幅広い調査研究を実施し、その成果をもって保護のための理論づくりに貢献することである。野鳥に関する基礎応用面の調査研究は大学や研究機関でも進められている。しかし、予測できない保護問題が発生してその対策に急を要する際などに、柔軟な取り組みで調査を行ない当面の保護問題に十分に対応することは難しい。本会は、日本各地であるいは全国、国際レベルで起こる保護問題を中心に、保護の主張を科学的に裏づける調査研究活動を目指している。

実際に本会の調査研究を実施するのは会員個人であり、支部やブロック、そして本部の研究部である。テーマや調査規模によって、支部あるいはブロックが中心となったり、個々の会員が受け持ったりと様々であるが、いずれも全国の会員がアマチュアとして活動していることは、大切な点である。誰もが保護問題解決の調査に意義を感じて参加しており、アセスメント会社などのようにスポンサーの意向で発言が左右されることもないからである。各地支部・ブロックと本部との、あるいは支部間の横の連携が強化されれば、組織的に全国や広域をカバーする調査を実施することが可能である。これこそ本会の調査活動の大きな特徴となっている。

活動の要となる本会研究委員会の役割りは次の三点に要約される。調査研究事項の選定・調査方法や結果の検討に対して、指導助言を行うことが第一の役割りである。調査結果をもって本会が当面する保護問題の方針決定に対し、調査研究の立場から提言することが第二の役割りである。そして活動が系統的、永続的に行われるように調査体制を整備するよう指導することが第三である。

第三点に関して具体的に達成すべき活動としては、調査技術の確立、調査マニュアルの整備、調査員体制の広域かつ均一的な確立および長期にわたる安定化と継続的發展、研修会の開催などが順次軌道に乗りつつある。当面の課題は、指導や発表の場となる研究報告を発刊することにあった。

調査研究に関心を抱く会員がふえる一方、支部やブロックでも研究部を設置して調査研究活動を積極的に行うところが増えてきている。ところが、これらの活動の成果を発表する機会は、これ迄にほとんど無いといってよい状況であった。「野鳥」誌上にある程度まとまった長さの報告を載せる余裕はない。有志であるいは支部の乏しい財源をやりくりして報告書が発行されるのは例外であり、その場合でも配布は限られた範囲にとどまっている。陰の力をまとめて文献資料として紹介する機関もないので、貴重な成果が同じフィールドの仲間にかえ目にふれないまま眠っていることが多い。本部研究部の調査結果も、委託調査の場合に必要な部数の報告書が委託主に提出される以外ほとんど発表されていない。

このような現状に直面して、調査研究の成果を発表できる機会を望む声が増大してきたのは当然のことであった。この実情に呼応し、本部研究部のめざす調査研究体制づくりの課題を積極的に実現すべく誕生したのが、*Strix*である。

*Strix* 発刊の目的は、日本野鳥の会の会員、支部、ブロックの調査研究活動の成果を発表する場とすることにある。研究者の五感を駆使してフィールドで記録したものが個人のノートの中に眠っている間は、その人の知的好奇心を満足させることになろう。しかし、成果が客観的に科学的にまとめられて公式の場に発表されてこそ、鳥学の発展、自然保護の推進に役立つ価値ある資料となるのである。それはまた、同好の士のお互いの勉強や刺激となり、投稿者自身も動機づけられるであろう。本会のフィールド活動では珍稀種や探鳥会の記録から、計画的組織的な調査研究まで膨大な資料が蓄積されているのに、その多くは陽の目を見ていない。そのため、*Strix* が活用されることをここに強調しておきたい。発刊に先立つ一年間に発行された文献、鳥界の動き、研究部やブロック・支部の研究部の活動紹介などの情報等を順次収録していくことも副次的な目的に加えたいと考えている。

目的達成の過程においては、単に投稿された論文を掲載するというよりは、投稿原稿が受理されるまでに調査の内容、結果のまとめ方、投稿形式などについて指導が行なわれることがまず重要と考えるのである。この指導助言審査の任に当るのが、研究委員会（樋口広芳委員長）を中心とするメンバーである。各専門メンバーは原稿に直接目を通し、問題のある箇所を指摘し、必要に応じて改稿の注意事項を記入して投稿者に原稿を書き改めて頂くのである。専門メンバーと投稿者の指導の流れの中で生まれる原稿の質の向上、また特に鳥学を志す人の底辺を拡げる教育的意義は少なくないものとする。

さらに *Strix* 発刊は、会員による基礎資料の蓄積や保護活動の理論づけなどを通じて、鳥学の発展や野鳥保護に貢献できることを期待したい。鳥界には「鳥」（日本鳥学会）や「山階鳥類研究所研究報告」（山階鳥類研究所）などの長い歴史と実績をもつ学術誌がある。*Strix* では、これらの学術誌に載らないけれども意義のある報告や論文をも掲載する幅をもたせている。習性や行動などの断片的ながら意味のある観察記録、鳥種またはテーマを決めての継続した調査報告や研究論文、野鳥保護などのアンケート調査結果、密猟・狩猟問題の評論、有害鳥や稀少種に関する主張、自然保護論など本会の調査研究活動を反映する広範な内容をもつ点で *Strix* の存在意義は今後一段と重要性を増すことになろう。

内容の性格づけは編集子に負うところとなるが、投稿原稿が主体となるためその質と量に性格づけのかなりの比重がかかることとなる。従って、始めから決めつけたものとせず、巻を重ねる内に順次かためてゆくことにしたい。肝要なのは、当然ながら内容的確性、調査研究の主体性や客観性、記録や事実関係の信頼性を重視することである。このため、投稿された原稿が総て受理掲載されるものではない点をお断りしておきたい。なお、本会の活動の国際化をふまえて、目次と主要論文には英文要約を付すこととした。

*Strix* の内容や性格は、ひとつには会員、支部・ブロックと本部事務局との連携プレーによって形づけられると考えるが、希望購読のため、全会員の手には行き渡らない。しかし、調査研究に興味のある特定の会員の行った報告が載っているというイメージ、あるいは調査研究は特定の会員がやればよいというイメージを乗り越えて、読者層を幅広いものとしたい。本会が野鳥の保護を目的とする以上、調査研究は会員一人一人の関心事である。その中から野鳥保護のための理論づくりや鳥学の発展にアマチュアとして力ある人材がひとりでも多く誕生することが望まれる。*Strix* はその中心的役割を担うものと考えられる。